

平成 21 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2006～2008

課題番号：18520135

研究課題名(和文) 現代女性文学における家族意識の変容

研究課題名(英文) Research of transformation of sense of family bonds in modern Japanese female literature

研究代表者

石田 仁志 (ISHIDA HITOSHI)

東洋大学文学部 教授

研究者番号：80232312

研究成果の概要：日本の戦後女性文学で描き出された「家族」像の変化を分析していった。1960年代までは男性中心の「家族」像に対して女性の視点からの問い直しがあり、経済性を根底にした家族の役割に懐疑的になっていく。70年代～80年代は核家族化の進行を背景に「家族」は急激に変化し、それまでの価値観から脱却して新しい家族を描き出そうとした。しかし、90年代以降は規範となるべき「家族」のあり方は失われ、家族意識や形態の多様化と同時に混迷の度合いを深めている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	210,000	1,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：家族、女性文学、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、フェミニズム批評の領域はつぎつぎと拡充されて来ていた。とくにジュティス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(1989)やセジウィック『クローゼットの認識論』(1990)の刊行後、近代社会におけるジェンダー規範の形成が如何に近代以降の人々の精神活動(特に自意識の形成や揺らぎ)に深く関わっているか、研究されてきた。一般に女性学の領域においては、現実の家族構成や家族意識、教育や就労の状況、労働意識などのフィールドワークを基に女性の自己認識の変遷を探究してきている。しかし、

戦後の女性文学という領域において表象されてきたものが、現実の女性の意識変化とどう関連付けられるのか、その具体的な様相を、戦後作品全般にわたって研究したものは皆無であった。本研究は、そうしたフェミニズム批評の見地を応用して、新たに、日本の戦後の女性文学における家族意識やジェンダーポリティクスを明らかにしようとするものであった。

「家族」というテーマが戦後の現代女性文学において如何に重要なテーマであり、かつ、女性表現者のアイデンティティの形成と変容の歴史的社会的な意味というものを明らかに

し、現在必ずしも体系的に研究されてはいない現代日本文学全般の研究に対して、一つの柱を置くことは急務である。

海外のフェミニズム文学批評に対する、本研究の位置づけは前述の通りであるが、日本の戦後文学における家族小説の変容と展開を明らかにすることで、日本の現代文化・社会におけるフェミニズム批評的な特色を明らかにできると考える。

また、日本においても、フェミニズム批評の成果は、例えば上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』(1994)、脇田晴子・S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史』(1995)、牟田和恵『戦略としての家族』(1996)、水田宗子他編『母と娘のフェミニズム』(1996)、赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』(1999)、『岩波女性学事典』(2003)などに顕著に表れている。

殊に、文学研究の領域においては、江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学』(1992)、北田幸恵ほか編『フェミニズム批評への招待』(1995)、中山和子・江種満子編『ジェンダーで読む『或る女』』(1997)、西川祐子『借家と持ち家の文学史』(1998)、関礼子『語る女たちの時代』(1998)、中川成美『語りかける記憶』(1999)、渡辺澄子編『女性文学を学ぶ人のために』(2000)、千石英世『異性文学論』(2004)などが顕著な研究成果として挙げられる。そうした研究は主に日本近代におけるフェミニズム批評と位置づけることが可能であり、中でも、樋口一葉、夏目漱石、有島武郎、雑誌『青鞥』などの個別的な作家研究・雑誌研究において、数多くの新しい研究が展開されてきている。

しかし、戦後の女性文学について体系的に研究したものはまだない。本研究は、そうした明治・大正期の日本近代文学におけるジェンダーポリティクス研究を踏まえて、「家族」というテーマに特化した形で、それをさらに戦後期へと発展させていくものと位置付けられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の戦後から現在に至るまでの女性作家の小説の中から「家族」を題名に冠する作品及び主要なテーマとした作品を抽出し、それらの作品において、「家族」に関する意識、表現、評価などのあり方とその変遷を分析し、戦後女性文学における家族意識の形成・変容を明らかにすることにある。と同時に、そうした家族小説を核とした、新たな日本の戦後文学史を記述するものである。また、「家族」をめぐる女性表現者の意識の中には、ジェンダーやセクシュアリティといった性規範意識も深く関わっていると思われるので、家族意識だけではなく、そうした性規範意識もどのように変容してきているかを併

せて考察していく。

戦後の女性文学の流れを、大きく第一期1945年～60年代、第二期1970年代～80年代、第三期1990年代以降と区分した場合、第一期は明治以来の日本近代における家族意識が戦後の民主主義の移入によって大きく変容する時期に当たる。そこでは当然の如く、男性中心主義的な「家族」のあり方が揺らいでいくが、ではそうした時期において、女性表現者たちは戦前的な「家」意識をどのように描き出そうとしたのだろうか。敗戦によって、日本社会の家族のあり方が一夜で一変したわけではなく、また、戦前から活躍していた女性表現者たちは、自らのジェンダー・アイデンティティ形成において、そうした戦前の「家」意識と向き合い続けてきたわけで、戦後第1期の変容期において、彼女たちが自らのアイデンティティの再構築を突きつけられたときに、どのような文学上の意識・表現の変化が起こりえたのかを明らかにする。

第二期では、高度経済成長下において、生活上の豊かさを手に入れ、女性は職場や家庭において新しい役割を発見しうようになる。しかし、そのことは女性の経済力や社会的な地位・責任の向上・増大とあいまって、それまでの戦後の家族像を大きく揺さぶり、解体していく。むしろそれは女性だけの問題ではなく、父権の失墜や家庭内における権力闘争として男性にも意識変革を迫るものであった。核家族化が急速に進行し、また都市化の波が大都市から周辺都市へと波及する中で、妻・夫・子供など様々な家族構成員の間で、「家族」をめぐる意識がどのようにずれ、どのように崩れていき、そして、どのような未来像を描こうとしていたか。離婚、教育、老人介護など、この期の小説で取り上げられる核家族化の問題性とそれに対する社会的な対応、表現者側の評価や理想などを踏まえて、その変遷を明らかにしていく。

第三期では、バブル経済の崩壊によって、日本社会が戦後50年間に渡って模索し続けてきた家族のあり方が、一気に行き詰まっていく。そこではもはや「家族」という形態そのものが自明のこととして成立し得ないものになって行き、女性表現者は「家族」という枠組みそのものを内側から相対化せざるを得ない地平に立たされる。しかし、文学の現象としては、この第三期は前二期とは比較にならないほどの量の、「家族」をテーマにした作品が書かれ、読まれているといえる。その現象が意味することは何であるのか、「家族」に関する言説が大量に出回る状況下で女性表現者は自らのアイデンティティをどのように形成しようとしているのだろうか。そこに展開されるポリティクスの様態を明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

(1) 主要な文芸雑誌や女性雑誌から、「家族」とタイトルに含む小説をリストアップする。また、それ以外に「家族」をテーマに含むと考えられる小説もリストアップし、両者をまとめて研究対象作品として、「家族」をテーマとした作品群のリスト化を進める。

(2) リストアップした女性作家の作品について、初出テキスト・単行本・全集(作品集)などを収集し、テキストクリティックを行い、定本を決定する。

(3) 上記の対象作品群に対して、以下の「家族意識」および「性意識」の観点に絞って作中人物および作者の言説を分析する。

「家族意識」(親や夫、子供に対する意識、家事・職業等に関する認識)

それをさらに ~ の項目に細分化して分析・分類する。

親に対する意識(家意識を含む)、子供に対する意識(家意識を含む)、家事・職業等に対する意識

「性意識」(身体感覚や対人関係における性欲動や恋愛観・死生観)

それをさらに ~ の項目に細分化して分析・分類する。

身体感覚、性欲動、恋愛観、死生観
上記の(ウ)の分析・分類を基盤として、現代女性文学の家族意識の構造を分析する。なお、その際、対象とした女性作家の個別的なファクターも考慮に入れ、通時的な観点からの変遷と、共時的な観点からの偏差を含めて、時代的な特徴を体系的に考察する。

4. 研究成果

(1) 1945年～1969年までの家族小説

2006年度は、日本の戦後の文芸雑誌を中心に、女性作家の小説の中から家族に類する題名に冠する作品及び主要なテーマとした作品を抽出し、「家族」に関する意識、表現、評価などのあり方とその変遷を分析した。対象とした主な雑誌は、「藝苑」「新小説」「小説新潮」「女性改造」「新潮」「人間」「婦人」「婦人倶楽部」「婦人文庫」「文藝春秋」など。

分析対象とした主な女性作家としては網野菊、大田洋子、円地文子、大原富枝、佐多稲子、芝木好子、中里恒子、林芙美子、平林たい子、真杉静枝、宮本百合子、森三千代、吉屋信子など。なかでも、この時期は戦前から活躍していた女性作家たちが旺盛な作家活動を展開した時期で、佐多稲子や大原富枝、中里恒子、林芙美子、真杉静枝、宮本百合子らの作品に家族や家庭、さらには戦後の女性の生き様を描いた作品が多く見られた。

それらの特徴としては、円地文子の「女坂」「女面」などに代表されるように、全般に恋愛や結婚など依然として「家」の意識に縛られている女性の生き方を描くものが多いが見

られた一方で、佐多稲子や林芙美子、宮本百合子らの作品にはそうした規範的な家族意識を揺さぶり、より自由な女性の生き方を求めんとするものも見られた。家族というものを解体しあるいはそれを否定する意識も萌芽していると考えられる。しかし、先に述べたように、円地文子や芝木好子の作品には、戦前的な家父長的家族意識を相対化しつつも、現実にはその中で苦しみながら生きていかざるを得ない女性の姿も描き出され、一概に戦後の個人主義・自由主義的な意識の中での家族意識の崩壊へと直結しない意識のあり方が捉えられる。性意識については、家族意識ほどは作品の中からは読み取れない。

(2) 1970年～89年までの家族小説

2007年度も文芸雑誌を中心に現代女性作家の作品を分析し、そこから読み取れる家族の姿、作中人物における家族意識のあり方、人間関係の展開を中心に考察を続けた。なお、本年度は初出雑誌だけではなく、所収単行本も対象とした。主な対象作家は、円地文子、倉橋由美子、大庭みな子、富岡多恵子、三枝和子、芝木好子、津島佑子、干刈あがた、永瀬清子、向田邦子、高橋たか子、増田みず子、山田詠美、吉本ばなな、柳美里、笙野頼子、川上弘美など。

70年代以降は、安保闘争後の社会変化を反映して、家族意識は次第に希薄化の傾向を示している。円地、大庭、富岡らが中年以降の夫婦における家族の変化を個人の内面的な問題として描き出している。なかでも大庭みな子の登場は象徴的で、「三匹の蟹」に代表されるような、専業主婦として夫を支え家事や育児を担ってきた女性の内面に、社会から取り残されたかのような空虚感が広がり、それまでの「家族」の中での自己の「役割」に対して同一化できなくなってくる姿を描き出す。高度経済成長を支えてきた家族意識の揺らぎが女性文学の中から起きていていると言える。

それに対して、70年代後半～80年代に登場する津島、干刈、向田らは、さらなる高度経済成長の終焉、不景気、家庭内暴力など、日本社会の価値観の変質を反映し、核家族化の進行による家族意識の違いを親子の間の世代間の隔絶として捉える傾向がうかがえる。干刈あがたが描き出す家族は、離婚や不登校といった問題を抱え、その中で夫に頼らない妻と子の新たな自立をめざしたり、社会の偏見に抗いながら成長していく。それが増田、山田、吉本、柳、川上といった80年代後半以降に登場した作品では、バブル経済の隆盛と崩壊、いじめ、ひきこもり、DVなど日本社会の光と影が深まり、少子化、核家族化がさらに進んだことと連動するかのよう、「家族」という関係性そのものへの懐疑が表出される傾向が顕著に見られる。

(3) 1990年以降の家族小説

2008年度に分析対象としたのは、松浦理英子「ナチュラル・ウーマン」(87)、小川洋子「揚羽蝶の壊れる時」(88)、乃南アサ「幸福な朝食」(88)、江國香織「きらきらひかる」(91)、多和田葉子「犬婿入り」(93)、笙野頼子「母の縮小」(95)「母の発達」(96)、川上弘美「蛇を踏む」(96)、桐野夏生「柔らかな頬」(99)、山本文緒「プラナリア」(00)、松浦「裏ヴァージョン」(00)、角田光代「空中庭園」(02)、桐野夏生「グロテスク」(03)、大橋希「セックス・レスキュー」(06)など。

90年代以降は、女性作家の中での家族意識の希薄化がより鮮明になっている。対象としたほとんど全部の作品で、家族を形成することに対する強迫的な意識はない。中でも角田「空中庭園」や桐野「柔らかな頬」では、形の上では幸福そうな平凡な核家族でありながら、女性たちが家族に対して秘密を持ち、内面的には夫婦や親子の関係を維持できなくなっている姿が描き出されている。家族というものが共有の価値規範としては意味をなさない解体的な状況が伺える。そうした「家族」解体的な状況は、乃南「幸福な朝食」では女性の狂気を誘発する強迫観念へと反転し、桐野「グロテスク」では自らの内的な欲動に突き動かされるようにして「家庭」から遠く離れて犯罪へと女性を転落させていく。

性意識という点では同性愛を肯定する傾向が顕著に見られる。江国、松浦の作品では女性作家の抱く恋愛観が典型的な異性愛主義から脱して、同性愛をも含めたより広範なものへと変容してきている。しかしその一方で、桐野や乃南、大橋の作品には自身の性欲や性意識の強さが社会からの差別や圧迫の中で歪められて、犯罪や狂気といった不幸へと転落していく女性の姿も描き出されてしまっている。その点では、性意識のバイアスは依然としてある程度の強度を持ったものとして女性作家に働いているといえる。だが、藤野千夜「少年と少女のポルカ」(96)「夏の約束」(00)のように、自身が性転換をした女性作家として登場し、男性同性愛を扱った作品を多く発表しており、性意識は、従来のジェンダーの枠組みから逸脱し、ジェンダーフリーな状況が広がってきているのも確かである。

(4) 今後の展望

当初の研究方法として掲げていた、小説タイトルから析出する家族小説の計量化は現段階では十分に示し得ない。そ

らは、実際に収集、分析した結果、必ずしもタイトルに「家族」を想起させる言葉が使われているものが家族小説であるとは言えないものも数多く含んでしまっていることが原因である。そのため、2007年度以降の研究ではタイトルではなく、作品にどれほど「家族」に関するテーマが重要なものとして展開されているかという観点に立って「家族小説」を分類せざるを得ないところがあった。今後は、収集した資料を再度検証して、本研究において素描できた「家族意識の変容」を計量化したのものとして提示したい。また、1950年～60年代に数多くの家族小説を発表している円地文子の文学世界をより深く考察し、戦後女性文学の出発点における「家族」の姿を再検討することも必要である。さらには、戦後だけではなく、戦後を強く規定するものとして大正期～昭和初期における「家族小説」の分析も今後は不可欠である。

歴史的・社会的な変化の記述は論文としてはまとめ切れていない。その点は、大いに反省すべき点と自覚している。たあ、むしろそうした記述を含みつつ、今後は個々の作家・作品に関する論文として成果を公表していく予定である(2009年10月)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

石田仁志、家族小説論(二) 山田太一『岸辺のアルバム』、「東洋」、第四五巻第十・十一号、P.16-25、2009年、査読無

〔学会発表〕(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 仁志 (ISHIDA HITOSHI)
東洋大学文学部 教授
研究者番号：80232312

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし